

ものづくりのDNA 富山の基幹産業

上空1万を、時速約900キロで飛行する旅客機。重さ200トンの機体を安全に運航させるには、世界基準の技術力と品質マネジメントが求められる。

石金精機(富山市流杉)は、米ボーイング「787」をはじめとする旅客機の機体部品や、ロケット部品など、航空・宇宙・防衛の分野で計約300品目を生産している。

1991年に創業。工作機械や自動車の部品、半導体製造装置の部品などを手がけてきた。利益が安定的に見込める航空産業を新たな柱にしたと考へ、2008年に参入した。

13年に、航空・宇宙分野の国際的な品質マネジメント規格「JIS Q9100」を取得した。コンサルと共に1年がかりで申請の準備をして、専門機関の厳しい審査をクリア。その後、この分野の受注が拡大した。清水克洋社長は「創業以来、顧客の厳しい要求に応え続けたことで技術が培われ、航空事業にも生き残り」と説明する。国産初の小型ジェット旅客

④ 航空・宇宙

安全・品質 技術でクリア



石金精機の本社工場。航空機分野の国際的な認証規格も取得している富山市流杉

成長市場に参入

機「MRJ」の主翼部品も受注した。ただ、MRJは三菱重工が20年にプロジェクトから撤退。現在は売上高のうち10%程度を航空・宇宙・防衛が占めるものの、撤退がなければ25%に達していたとみている。清水氏は「今後は、MRJの分を取り戻せるよう営業に力を入れる」と語る。

航空機や航空機部品の国内生産額は、25年に初めて2兆円を超えた。コロナ禍の収束による観光需要の回復などが背景にある。

15年ほど前に航空・宇宙分野に参入した本田精密工業(富山市町村)は、ドリルやエンドミルなどの工具を生産している。ボーイング「787」「777」などの機体やエンジン、H3ロケットなどの先端部の加工を担う工具を複数の大手メーカーに納入している。

1980年の創業以降、オーダーメイドで、さまざまな材料に対応した工具を手がけてきた。航空機やロケットはカーボンやアルミ、チタンなどの複合材が使われることが多い。幅広い素材の切削を可能にしてきた技術の蓄積が生きている。

航空・宇宙産業で使われる工具は複雑形状のものも多く、機械だけでなく職人技も必要となる。同社の強みは熟練の職人たち。製品の加工は手作業も多く、職人が工具の先端を最適な形状とするため、手動の研削盤を繊細に動かして研磨している。本田拓也社長は自社事業を「金属のお医者さん」と言う。高精度の「切る」「削る」を生み出せる技術を持ち、先端産業を支える自負がのぞいた。